

新型コロナウイルス対策について

1. 厚生労働省の呼びかけ

- ① コロナウイルスの感染は、飛沫感染または接触感染によって生じる。
- ② 飛沫感染の予防には「**密集・密閉・密接の重なるところをつくらない**」
- ③ 最新の分析では、上記に加えて「**大声での発声**」を伴う活動が最もリスクが高い。
- ④ 他人に感染させないためにマスク着用は有効。(自己の感染防止効果は限定的)
- ⑤ 接触感染の予防には、**手洗い・アルコール消毒の徹底**が効果的。

2. 合格工房における感染防止対策

一般の学習塾と異なり、密集状態がなく、また生徒同士が密接する場面もありません。そのため、飛沫感染によるクラスター(集団感染)発生リスクは低い環境だと考えられます。さらに感染リスクを限りなくゼロに近づけるため、以下の感染防止対策を徹底します。

教室側の対策

- ① ドアノブやスイッチ類、共用する音読用の机など、複数の生徒が触れる箇所は、塩素系漂白剤を使用(厚労省推奨)して毎日消毒作業を行います。
- ② 授業中は教師もマスクを着用します。
- ③ 教師に発熱、咳、倦怠感、味覚・嗅覚の異常等の症状がある場合は授業を休講します。
- ④ 日中は定期的に窓を開けて換気を行います。

生徒の皆様へのお願い

- ① 授業、自習室の利用を問わず、**37.3°以上の発熱**がある日は、来塾を控えて下さい。
- ② **咳**が出る場合も来塾は控えて下さい。
- ③ 来塾した際は、まず必ず**ハンドソープを使用して手洗い**を行ってください。
- ④ **授業を受ける際はマスクを着用**して下さい。自習中のマスク着用は任意です。
- ⑤ 教室内では先生への質問以外の**会話はしない**で下さい。自習室での他の生徒との私語はもともと禁止です。友人に用件がある際は、いったん外に出て話をするか、筆談で済ませて下さい。

新型コロナウイルスについて

新型コロナウイルスの危険性について、中国でこのウイルスが発生した当初から3月上旬までは、致死率が1%~2%程度に過ぎないことから、「インフルエンザ程度」「過度に怖がる必要はない」「不安を煽ってはいけない」という意見が、マスメディアやネットでは多く見られました。医療の専門家の間でも見解が分かれ、さらに欧米各国は日本以上にこのウイルスについて脅威とは考えていませんでした。

しかしマイクロソフト創業者のビル・ゲイツをはじめ、一部の知識人たちは「100年に1度のパンデミックになる」と早くから警告を発していたのです。現在の世界中での爆発的感染の広がりや、欧米での医療崩壊を見れば、どちらが正確な認識であったかは、もはや言うまでもありません。

新型コロナウイルスの危険性を理解することは容易ではありませんでした。このウイルスの脅威は、致死率ではなく、「感染力」と「重症化率」にあります。この組み合わせが、**人口呼吸器を始めとする医療リソースを食い尽くし、医療崩壊をもたらす**のです。医療崩壊が生じると、適切な医療が存在すれば助かったであろう生命も失われることになり、致死率は5%以上に膨れ上がります。イタリアやスペインで死体の置き場すら足りなくなっているのは、このような背景があります。

一方で、不幸中の幸いと言えるのは、**未成年者の感染者数、重症者数、死者数が、極端に低い**という事実です。これは世界各国の統計で明らかです。日本では学校の休校措置を巡って、休校延長か学校再開か、大きな議論になっています。保護者の間では不安感が広がり、再開に反対する意見が多いのですが、厚労省の専門家会議は会見で「こどもたちの中で伝播がおこって増えたというエビデンスはない。学校休校に感染拡大抑止の効果があるかは専門家会議としては示せない。インフルとは違う対応を求められている」と述べています。

必要な感染防止対策は充分に行っただうえで、生徒たちとは過度に新型コロナウイルスを恐れる必要がないことを、科学的な見地から、共有していきたいと思います。

私を含め40代以上の大人にとっては最大限に警戒すべき危険なウイルスです。感染してしまうと20%の確率で重症化し5%の確率で人工呼吸器が必要となります。生徒の皆さん（感染しても無症状の可能性が高い）は、ご家族や先生にうつさないためにも感染予防に努めて下さい。